

国際交流が本格化



秋期留学プログラムの参加者と講師陣

秋期留学プログラムスタート 16人が日本語学ぶ ウクライナ支援も

秋期の留学受け入れプログラムが始まり、9月26日、生田キャンパスで開講式が行われた。プログラムは、日本語学習を希望する外国人を対象にした「秋期日本語・日本事情プログラム(JLC)」と、国際交流協定校の学生を対象にした「日本理解プログラム(BCL)」。

JLCでは、レベルに合わせた日本語の学習のほか、さまざまな日本文化を体験する。BCLでは、日本語や日本の文化、ビジネスについて学ぶ。12月16日まで国際交流会館に滞在する。今回は両プログラムで、フランス、ドイツ、スペイン、アメリカ、カナダ、タイ、韓国の学生15人と、特例としてウクライナから日本に避難している一般希望する外国人を対象にした「秋期日本語・日本事情プログラム(JLC)」と、国際交流協定校の学生を対象にした「日本理解プログラム(BCL)」。

寮内留学 2年半ぶりに再開

これに先立ち9月2日、国際交流会館で専大生が留学生と生息する「寮内留学」が2年半ぶりに再開された。コロナ対策として、入寮生を通常の3分の1



歓迎会でゲームを通して交流する留学生と日本人学生。9月26日

の5人とし、1人部屋での生活になる。寮生であるレジデント・パートナー(RP)は「留学生と過ごす中で、さまざまな価値観を学びたい」と話している。寮内留学は、約半年間、短期留学生や交換留学生らと共働生活を行い、留学生のサポートを通じた異文化理解や、国際コミュニケーション力を養うことを目的としている。コロナの影響で2020、21年度は中止されていた。

今年度後期の寮内留学プログラムには筆記試験と面接で選ばれた法、商、文、ネット情報、人間科学の各学部1、2年次生5人が参加。事前研修としてEnglish Campや異文化間コミュニケーショントレーニングで語学力と異文化理解の基礎を学び、来年3月2日まで、来日する短期留学生らと生活をともにする。

東南アジア・オンライン・スタディツアー 初開催 タイの魅力に触れる



スタディツアーの成果を報告する学生

専修大学では、さまざまな形で外国語や異文化を学ぶ機会を提供しており、海外に渡航する留学プログラムに加え、日本にいながら参加できるオンライン留学プログラムを実施している。今年度は新たに「東南アジア・オンライン・スタディツアー」を開講し、9月5～15日に研修を行い、24日には生田キャンパスで成果発表があった。

このプログラムは、著しい経済発展を遂げる東南アジア圏(ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ)の社会や文化に対する理解を深めることを目的としたもので、今回はタイの魅力に触れる。植田莉央さん(商3)は「SDGsの取り組みなど、貴重な話を聞くことができた。自分の英語の上達も実感できた」と振り返った。高橋あかねさん(経済1)は「タイの学生は、社会の課題や問題に対してしっかりと自分の意見を持っていた。私も自信を持って発言できるように、今後の大学生活で努力したい」と語った。

ウクライナ現地取材から 戦争報道の意義を考える

専修J「表現の自由」を考える連続講座

文学部ジャーナリズム道義の意義や難しさなどに学料と現代ジャーナリズムについて話した。△研究機構は7月30日、神田キャンパスでシンポジウム「戦争報道の価値と難しさ」を開催した。

須賀川さんは、これまで「戦争報道の価値と難しさ」について話した。須賀川さんは「戦争報道の価値と難しさ」について話した。

学生や一般の方から約200人が聴講するなか、ジャーナリストの綿井健陽さん、TBS中東支局長の須賀川拓さんが、ウクライナで撮影した映像を映しながら、今現地で起きていること、戦争報

道の人たちに支援が届き、一人でも多くの難民が救われ、一つでも紛争がなくなることを目指したい」と、報道の役割を語った。



戦争報道について考えたシンポジウム

メディアが訪れた。その様子も須賀川さんが自身の撮った映像を交えて話した。須賀川さんは「戦争報道の価値と難しさ」について話した。

シンポジウムは「専修J「表現の自由」を考える連続講座」の3回目。初回(7月2日)はメディア総合研究所事務局長・岩崎貞明さんが「攻めて守る表現の自由」「表現の自由」をテーマに講演した。

文学部ジャーナリズムのオンラインセミナー「活躍する先輩の話」を開催した。8月25日に開かれた。

オンラインセミナー 先輩ジャーナリストが 仕事のやりがいを語る

やアナウンサーも多く、セミナーはそうした仕事に関心を持つ学生たちのために企画された。澤康臣教授が進行役を務め、放送局や新聞社で働くOB・OGによる講演、内定を得た4年次生による就活体験の報告などが行われた。

首里城火災での現地レポートを振り返る小林さん



と説明。2019年10月に発生した首里城火災では現場レポートを務め、「報道の役割を再確認した博物館学など、大学で

た現場であり、アナウンサー人生において大きなターニングポイントになった」と振り返った。入社1年目の小林さんは、支局に勤める山崎さんは、「記事を書いて掲載することで、歴史の一部を記録している」とやりがいを語った。警察担当として奮闘する。専大でジャーナリズムを学んでいることに自信を持って将来の進路を見つけてほしい」とエールを送った。